短信

大阪府内の識字・日本語教室における学習の諸相と今後の課題

福島　和子

大阪府内各地で開催されている「識字学級」「日本語読み書き教室」「外国人のための日本語教室」等の実態を把握するため、大阪府教育委員会が各教室の協力を得て二〇〇二年一〇月から翌年二月にかけて実施した「識字学級等調査」結果の概要は本紀要の二〇〇四年八月号で「大阪府の識字・日本語教室[1]の現状と課題」として報告したが、それぞれの教室現場における学習状況について、先述の調査と同時に実施した『教材』についての聞き取り調査[2]」結果も包括して報告するとともに今後の課題を考察する。

一　識字・日本語教室の学習形態と主な特徴

全体的に最も多いのは一対一の個別学習で、学習者と支援者(講師／ボランティア)の参加状況に応じて、一部が支援者（講師／ボランティア）一人につき学習者二、三人の共同学習になる形態である（表1）。同和地区の識字学級が九割を占める識字教室や識字学級から発展した識＋日教室の多くが、全体学習（ビデオ教材等による人権学習、簡単な手芸・工作等の創作活動、健康増進や時事問題など日常生活に役立つ学習、パソコン講習や年賀状作り、同和地区の文化祭発表準備など）を定期的／随時／毎回組み入れている。多民族・多文化共生理念に基づいた識＋日教室、識字学級から独立した日本語教室のなかには、参加者の一体感を図るために全員で歌を歌ったり、料理作りなど互いの文化理解を深めるための全体学習的活動を取り入れている所もある。他の多くの日本語教室では、同様の活動を一斉学習／学習外行事[3]として取り組んでいるようだ。

グループ学習には個別指導型と一斉授業型があり、一人の支援者（講師／ボランティア）が四、五人の学習者を個別指導している教室が多い。

表１　学習形態

	１対１＋全体学習	１対１／２・３人学習	グループ学習	一斉学習	その他
識　字	23	7	3	7	10
識＋日	14	26	9	1	4
日本語	0	57	10	16	4

一斉授業形式の日本語教室は有資格日本語教師によるレベル別指導が多く、入門・初級段階の学習者の場合、ボランティアとの一対一の学習より効率的に日本語の基礎を習得するようである。識字教室では一斉授業形式は少ないが、学習者のニーズを熟知した講師（陣）による入念な教材作りや巧みな指導法で、学習者の出席率も高く、あたたか味のある授業が展開されている。

その他に分類した識字教室は、基本的な読み書き学習から特定分野の学習（習字五件、人権学習、ワープロ・パソコン、創作活動、上記の複合型が各一件あり、形態も様々）に移行した所である。識＋日教室では学習者（外国出身者も含む）・支援者全員での共同学習、韓国・朝鮮人一世のための母語と日本語の複合型学習、日本語と多文化・多言語交流活動などユニークな形態があり、日本語教室では日本語と英語、中国出身者への一斉授業とその他の人々への個別指導、大人の日本語学習と子どもの学校の補習と母語学習、学習外活動のみ等、多様化している。

二　学習内容と教材

識字学習の場合

識字教室では漢字を中心とした読み書き学習が過半数を占め、習字（毛筆・硬筆）、パソコン／ワープロ学習と活用、作文・手紙・日記・俳句等の創作的学習、算数（計算）の順に多かった。読み書き学習用には市販の小学生用教材（漢字ドリルなど）と講師の自主作成教材が大半であったが、小学校の国語教科書や人権学習用教材『にんげん』、相田みつを著『にんげんだもの』、新聞の切り抜き、解放新聞、学級通信なども活用されていた。習字は市販の実用書道教材のほか、習字中心の五教室では講師が手書きした手本が使用されていた。ワープロ学習者もわずかにいるが今やパソコン学習が主流となり、基本的な操作方法をはじめ、ホームページを作成して日記を書く、絵本の書き写し、地域の伝承料理本の制作、パソコンソフトでの年賀状やカレンダー作成など多彩であった。パソコン学習熱の高まりとともにローマ字学習

者も増えている。近年、バイク・自動車免許取得を目指す学習者は減少しているようだ。

識＋日教室では、漢字を中心とした読み書き学習が大半で、市販の小学生用教材や講師の自主作成教材のほか、新聞の切り抜き、小・中学校の国語教科書、小学生新聞、童話、随筆、詩集が活用されていた。作文（自分史や生い立ち）を書いたり、年賀状を手書きする学習者に比べ、習字やパソコン／ワープロ学習者は非常に少ない。

日本語学習の場合

日本語学習用の市販教材は初級から上級レベルまで多種多様にあるが、一斉授業形式の日本語教室の八割、個別形式の多くの日本語、識＋日教室でも『みんなの日本語　初級Ⅰ・Ⅱ』（スリーエーネットワーク）が使用されている。中国帰国者のための日本語教室では『生活日本語Ⅰ・Ⅱ』（文化庁文化部国語課）が使われ、中国人学習者が持ち込む教材で最も多いのが『標準日本語　初級1・2』（光村図書、中日交流、中国中央電子台等）である。個別形式の日本語、識＋日教室では日本語能力試験（一級～四級）対策用教材が『みんなの日本語』に次いで多かった。日本語学習者は「読み書き」より「会話」の上達を優先する傾向があり、特に教材を用いずボランティアと一対一で自由会話をするだけの人も多い。学習者が持ち込む文字媒体には、幼稚園・小学校の連絡帳や通知書類、電気製品の取扱説明書、バイク・自動車免許取得試験の問題集、病院の案内、スーパーのチラシ、家庭料理のレシピ集、パソコン用テキスト等のほか、子どもの補習教室では小・中学校や高校の教科書などがあった。講師／ボランティアが手持ちの品（ハンカチ、名刺、電卓、雑誌）や教室内にある物を活用したり、入門段階で共通の媒介語を使えない場合は身振り手振りを使うことも多い。

三　学習者のニーズに対する支援態勢と教材

識字学習者の「今後学びたいこと」第一位がパソコンという結果は、急速に情報化が進む現在では当然と言える。しかし、唯一の専門教室を含めても、必要な台数をいつでも使える教室はまだわずかで、パソコン指導もできる講師は少なく、全体学習として単発的なＩＴ講習会や年賀状作成、講師持ち込みのノート型パソコン等で個別学習する例が多い。他方、ひらがな・カタカナから学びたい、自分の名前・住所を書けるようになりたい、一人で電車・バスに乗って外出したい、市（区）役所での

手続きや病（医）院で病気や薬の説明が解るようになりたい、手紙を書いたり、本や新聞を読めるようになりたい人々もまだ存在する状況で、学習者の要望や進度に合わせて創意工夫に富んだ教材を作成する講師もいるが、市販の小学生用漢字ドリルで対応している講師も多い。長い人生経験を積んだ高齢の学習者に小学生用の教材では心苦しいので、文字とふりがなを大きく印刷した大人用の読みやすい短篇集や学習者と共に学べる教材の作成を望む声や、識字学習のための体系的な指導方法や教科書がまだないので開発してほしいとの要望も出ている。同和地区の一部の識字学級では以前から地区・周辺地域在住の在日韓国・朝鮮人一世が共に学んできたし、最近はその他の国・地域出身者も増えてきているのに、日本語教授法をふまえて指導できる講師は非常に少ない。したがって入門・初級レベルの外国出身学習者は非常に少なく、地区・周辺地域で長期定住する中・上級レベル学習者が比較的多い。

日本語学習者は今後も「会話の上達」が最優先で、語彙（特に慣用表現）を増やし、聴解力を高め正しい発音で話せるようになることを望んでいる。読み書きについては、日本語特有の幾通りも読み方がある「漢字」の学習を挙げた人が中国など漢字圏出身者も含めて最も多く、「ひらがな」では長音・拗音・促音等の表記法や、助詞の用法など文法的に正しい日本語の習得を望んでいる。『みんなの日本語』をはじめ市販の日本語学習用教材は豊富であるが、日本語教師が一斉授業形式で基礎から積み上げて指導するためのテキストが多く、ボランティアとの組み合わせが一定ではない個別学習の教室では、もっと日常の家庭・社会生活に密着した内容（家庭ゴミの出し方、電話のかけ方、道のたずね方、電車・バスの乗り方、銀行や郵便局の利用方法、病院の受診方法、市役所での外国人登録や医療保健の手続き、市の広報紙や回覧版の見方など）を盛り込んだテキストを望む学習者・支援者からの声が多い。在住外国人向け生活ガイドブックとして大阪府が作成した『大阪生活必携』や、大阪市が作成した『エンジョイ・オオサカ』は多言語化されていて、学習者からの要望が多い緊急事態（火事・急病・犯罪等）の対応窓口や様々な相談窓口のリストも掲載されているので、支援者が工夫して使えば格好の教材になると思う。大阪という土地柄も大いに関係があるが、テキストの会話表現は丁寧すぎる、教室で講師／ボランティアが話す言葉は聞き取れるが、教室外で耳にする言葉は聞き取れない、大阪弁に戸惑うという学習者が多い一方で、職場での上下関係や取引先との関係から敬語・丁寧語の習得

を必要とする人、女性では妊娠・出産・育児・子どもの教育などに関わる言葉や女性語も習いたい人も少なくない。特に病院や役所等の書類や手続き、子どもが通う幼稚園・小学校等からの書類への対応に苦労している人は多いので、支援者は学習者のニーズを的確に把握して対応する必要がある。最近氾濫しているカタカナ語については、外来語か和製英語か解らず困っている日本人は多いが、英語圏出身者から「英語をカタカナで表記する場合に法則はあるのか？」と問われ返答できなかった支援者もいる。外国語のカタカナ化についてはカタカナ語の適正な使い方とともに、今後も国レベルでさらに検討されるべき課題であろう。

四　多様化する学習と教室の将来

現在の識字学級では、日常生活で困るから「読み書き計算」を基礎から学んでいる人や社会参加するために資格・免許取得が目的で学んでいる人より、教室で学ぶことが生きがいで通う人や基礎学習を卒業して習字、俳句、パソコン、その他創作活動など特化した分野を生涯学習的に続けている人のほうが多く、全体的に高齢化が進んでいる。他方、第一世代が当初の目的を果たして退いた後、高卒以上の学歴を持つ第二世代の女性たちが教室を引き継ぎ、自発的に人権学習や創作活動をしたり、自己啓発に取り組む教室もある。識字学習は、現職の小・中学校教員が一対一で支援している例が多いが、教員の確保が難しくなっている現状から、今後はボランティアの参加も積極的に考えたり、他の教室の実例も参考に、一斉授業やグループでの共同学習など新たな学習形態を模索する時期に来ているようにも思われる。

識字＋日本語教室では、今や日本語学習者が圧倒的に多いが、同和地区外にもまだ多く存在する識字学習希望者の重要な受け皿であることも認識して、新規の学習者をいつでも受け入れてもらいたい。これは、多民族・多文化共生の理念を体現することにもなるだろう。「識字」と「日本語」という異質なようで案外共通項が多い学習を、学習者と支援者がこれからも模索しながら続けていけば、いずれ「識字・日本語教室」で共通に使える教科書も作れるのではないだろうか。

外国人のための日本語教室は、学習形態、内容ともに多種多様で、支援者のなかでも特にボランティアの活躍が目立つ。日本語学習だけに重点を置く教室、学習者とボランティアとの活動を主にした教室、特定の国の出身者が集っている教室、周辺地域とも交流活動を広げてい

る教室に分かれる。今後も多様な学習形態や交流活動が生まれるだろうが、地域と学習者が繋がるような交流活動が増えることを期待する。

「識字・日本語教室」活動が今後も進化発展するためには、従来からの教室・学習者間の交流だけでなく、支援者同士も交流して指導法や教材を学びあうことが必要であると考える。

注

（1）教室の学習目的により、「識字教室」「日本語教室」「識字＋日本語（以下、識＋日で示す）教室」に分類し、調査結果を分析した。「識字・日本語教室」はそれらの総称とする。

（2）教室で活用されている教材や今後の学習内容の傾向を把握し、大阪府教育委員会による今後の教材開発事業等に反映させるため、各教室の協力を得られる範囲内で、個別学習形式の教室では二、三組の講師または（以下／で示す）ボランティアと学習者から「現在学習している教材」と「今後学習したい内容」、一斉授業形式の教室では担当講師から「現在学習している教材」と「教材についての意見や要望」を訪問調査員が尋ね、約九割の識字・日本語教室から何らかの回答があった。

（3）学習外行事は、識字教室に比べ日本語教室で多彩である。識＋日教室は日本語教室より長期定住外国人が多く、地域社会との交流がやや多いようだ。

（識字教室）　開／閉校式、地域の文化祭での発表、よみかき交流会、府内ブロック別交流会、忘年会／新年会、料理作り、市内社会施設見学、近郊日帰り／一泊旅行、他学級／地域小・中学生との交流会など

（識＋日教室）　忘年会／クリスマス会、パーティ（食事会・茶話会など）、料理教室、近郊日帰り旅行、府内ブロック別交流会／地域の祭り／文化祭への参加、地域住民／市内小・中学校／他教室との交流会など

（日本語教室）　忘年会／クリスマス会／春節祭、お花見など季節の行事、ハイキング、キャンプ、芋ほり、料理教室、パーティ（食事会・茶話会など）、地域の文化祭への参加、バザー、スピーチコンテスト、着物体験会、カラオケ、ボーリングなど